
true sword

黒塚昂夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

#true sword

【Nコード】

N9176A

【作者名】

黒塚昂夜

【あらすじ】

突如訪れた絶望。男は独り、戦地へ赴く。灰塵と化した友、無惨に切り裂かれた両親、男の心を写す白鞘。仕組まれた人生、馬鹿げた計画、崩れていく世界。絶望と破壊に満ちたこの世界に、男は何を見るのか・・・

〔 Prologue 〕

ただ、この日常が続けばいいと思っていた。笑って、泣いて、悩んで。だけどそれは幻想だった。俺には悩み留まることすら与えられなかった。

時は俺に二つの選択肢を与えた。

独りで生きるか。

死ぬか。あまりにも無情なこの選択を、運命ってやつが突き付けた。俺もバカだな。大した誇りもなあ意地を張って勝手に苦しんで。見ってくれる人もいないっていうのに。後に引けなくなって今更後悔してんだよ。

以前の俺ならとくに果てただろうな。本当バカだよ俺。綺麗な生き様を見て、俺もできるって思ってたやんの。ハハ、本当バカだな。いっぱいいいのクセにまだ望んでやがる。あいつと俺は違うっての。

ああ。だけど……。アイツは俺を信じてくれた。最後の最期まで。微塵の曇りもないあの真っ直ぐな眼差しで。無理だったってものガンてして聞きやしねえ。

けどまあ、あれだけ俺を信じてくれたんだ。こんなところで諦めたら泣いちゃうだろうなアイツ。泣き虫だし。アイツのためってワケじゃねえけど、最期まであがいてみるかな。大丈夫、きっとできるさ。他人のアイツが俺を信じたんだ。俺が俺を信じれねえワケねえんだ。やってやるさ。けどアイツのためじゃねえからな！

～日常～

「オイコラ加賀野、ちよつと面貸せや」

よくいる手合いだ。テメエの力じゃ何もできないクセに口先だけは一人前だ。そのくせ自分の気に入らないものはとことん拒絶する。表面だけ着飾って中身はグダグダ。似合ってねえぞその剃り込み・

「テメエよくも俺の舎弟やってくれたな。高くつくぞ。あ？」

何が舎弟だ。一人前に年上ヅラしやがって。ロクなこと教えてやがらねえクセに。その阿保の舎弟に勉強でも教えてやれや。お前らみたいな軽くて安っぽい人間のどこが高けえんだよ。ほとんど無価値だったの。

「なんか言えや。ん？びびっちまってだんまりかあ？謝るんなら今の」

グシャッ。肉が潰れた音がした。鼻も折れたか？あ、鼻血出てんぞ。

「アガッ！は、はにゃがあ！ひきひよう！」
「ベラベラうるせえ。その口閉じんの手伝ってやつからかかってこい。」

バカだな。そんな大振りのパンチ当たるかよ。てかこいつらバカだなぁ。せっかくたくさん居るのに全員正面から来てやんの。三流のアクション映画並だわ。

「テメ・・・加賀野、後悔す、ブハッ！」

「誰が喋っていいなんて言った？敗者が口聞いていいと思ってんのか？負けた時点でテメエは死んでんだよ。」

そうだ。敗者に語る権利はない。勝ったのは俺だ。弱者は従え。殺し合いなら死んでんだぞ？命があることに感謝しろ。口開くんなざ頭が高けえんだよ。

俺の前に立つのはこういう手合いばっかだ。勝てなきゃつるんで立ち塞がる。俺の前に立つな。弱い。弱すぎだ。ハッキリ言って興ざめだ。意気がいいのは最初だけ。仕舞いにゃこつちも限界超えちまうって。死んでも文句言うなよ？

「コラァ！何やってる！加賀野！ちよつと職員室まで来い！」

・・・世の中こんなばっかりか？・・・

「ねえ聞いた？二年の加賀野、またやったらしいよ？斎藤たちメツタにしちやっただって〜」

「聞いた聞いた。でも加賀野くんてめちやくちやかっこよくない？成績優秀スポーツ万能おまけに喧嘩は最強だし！」

「料理とかもできるらしいよ。正に才色兼備ってやつ？いいな～あんな子と一つ屋根の下だなんて。明里羨まし～」

「どこがよ！あんな奴、喧嘩ばっかじゃない。調子に乗ってるのよ、暴力なんて最低じゃない」

「信じられない～あんなカッコイイ弟が居るのにさあ～。アタシだったら襲っちゃうかも♪」

あんな奴のどこがいいのよ。家にまで面倒持ち込むし！いくら頭良くて暴力振るうなんて最低よ。それに……アイツは本当の弟なんかじゃないんだから……

つたく。つまんねえ説教しやがって。教師ってのは気に入らねえ。特にああいう頭ごなしにもの言うヤツは忠実な人間が欲しいだけじゃねえか。苛立つ真司の背中を何者かが勢い良く叩いてきた。

「おう真司！またやらかしたんだろ？！お前も懲りねえなあ！」

「真ちゃん頭良いんだから勿体ないよ。」

この真逆の性格の二人は俺の親友だ。明るく豪快なのが木戸雅哉、おとなしく引っ込み思案なのが倉西勇氣。二人とも同じ孤児院の出である。

そう。俺は孤児だったのだ。加賀野という名字も引き取られた家のものだ。俺達は偶然この学校で再会したのだ。

「そうそう。俺なんか進級できるかも危ういつてのによ。」

「雅ちゃんまた赤点取ったの……？そろそろ真剣にマズインじゃ

ないの？」

「るせー！お前は勉強ばっかしすぎなんだよ！ひよろひよろじゃねえか！肉食え肉！」

そんな二人のやり取りに俺は中々参加できずにいる。どうもワイワイじゃれるのは苦手だ。それに俺はこんな二人のやり取りを見ているのが好きだった。どうも俺は悲観的になる傾向があるみたいでいつも世の中に諦観してしまふ。けれどなぜかこいつらといると心が落ち着いた。喧騒に明け暮れる俺を受け入れてくれたからだろうか。ここだけが俺の掛け替えのない居場所になっていた。

そんな風に考えながら今日も俺はこいつらと共に帰路を辿る。いつものように。この細やかな幸せを。

（異変）

「じゃあ、またな」

そう言つて二人と別れて家の門を開けた。中々立派なこの門は剣道場の入口で、うちの家は道場を開いている。これがなかなか名の知れた流派で俺も囓っている。

道場から聞こえてくる掛け声を過ぎて家のドアを開けると、いつもと変わらぬ母さんの

「お帰りなさい」

が俺を出迎えた。母さんの声は温かい。家というのはやっぱりいいもんだとつくづく思う。

靴を脱いでリビングに入ると先程の考えを多少改めた。居た。明里だ。この女だけはどうも気に食わない。横目で俺を睨みつけると噛み付くように言い放った。

「アンタ、また喧嘩したんだってね。いい加減にしたら？アタシはアンタが怪我しようが死のうが興味ないけどとぼちりだけはゴメンなのよ。」

少し成績が良いからって調子に乗ってるんじゃないわよ。アタシはアンタと違って和平第一なんだから」

またいつものグチだ。全くもって虫酸が走る。こういう類の平和主義者は偽善の塊だ。口先だけでは愛だの平和など綺麗事を並べているがただ自分が厄介事に巻き込まれたくないだけなのだ。

それに成績は関係ないだろうが。単なるやつかみだ。それからこいつには俺を嫌うとおきの理由がある。

実は俺はこの家の本当の子ではない。俺は養子でこの家の誰とも血は繋がっていない。もちろんこの女ともだ。嫌う理由は余所者だ

からというだけではない。

十年程昔、本来ならこの家にはもう一人子どもが生まれるはずだった。しかし不良の喧嘩に巻き込まれて流産。以後この家に子どもが生まれる事はなかった。

道場の後継ぎという事もあり連れて来られたのが俺だ。その俺がこんなもんだからこの女は大層御立腹で俺を目の敵にしてる。正直迷惑な話だ。

こういう手合いは真面目に相手をすべきではない。適当に相槌を打ってさっさと2階へと上がる。今日は夕食の後に雅哉達と約束がある。一応宿題に手を着けておく。

1時間もすると夕食ができた。いつもと変わらぬ食卓。早々と食事を済まして早速家を出る。明里は相変わらず俺には無関心だったが母さんは別だった。

「気をつけてね。遅くならないようにね」

母さんの心くばりもこの時の俺の耳には入らなかった。いつも通りの同じ言葉。これが最後の言葉とも知らずに。

家を出ると早速自転車に跨がり約束の場所へと向かう。静まり返った闇夜をただただ突き進む。まるで引き返すことのできない奈落へ沈んで行くように……

自転車を留めて寂れた建物へと入って行く。未完のこの寂れたビルは欠陥が見つかり建設中止となった。取り壊すのにも金が掛かるという事で今は放置されている。

10階ほど上がると男が二人。雅哉と勇氣だ。軽く挨拶を交わしていつものように菓子を囲んでしがない会話で盛り上がる。やっぱりここが俺の居場所だ。こいつらというの考えると考えることも悩むことも

ない。腹を割って自分が出せるからだ。

あつという間に時間は過ぎて夜も更けてきた。そろそろ帰ろうか。その時、事件は起きた。

「おい、なんか揺れてないか？」

「地震・・・？ねえ、ここ危ないんじゃないの？」

小さな揺れは一向に止まない。ここは欠陥ビルだ。地震なら危険だ。早々にその場を離れようとした、その時だった。

「つつあ！頭が・・・いつてえ・・・！！」

「何これ・・・真ちゃん・・・」

突然の頭痛に俺たちは思わず膝をついた。耳鳴りまでしてきやがった。頭痛はどんどん酷くなっていく。頭がかち割れそうだ。全員その場で悶えることになった。

イテェ！頭が、割れる！死ぬ！やばい。このままだと本当に死んでしまう。

頭痛はますます酷くなり、意識は薄れてきた。痛みは容赦なく襲い掛かる。もう、限界だ。

俺達はその場で事切れた。闇を切り裂くような断末魔をあげて・

（巨獣）

何が・・・起きた？死んだのか？ 頭が・・・いてえ。何が起きた・・・？生きてるのか俺は・・・？

痛む頭を抱えながら、ゆっくりと痺れの残る身体を起こす。膝を付きながらもなんとか立ち上がることができた。

俺、どうなったんだっけ・・・ 確か雅哉達と喋って・・・
それから・・・

疑問の答は頭の痛みが教えてくれた。小さな揺れと突然の頭痛・・・
。 思わずハッとして辺りを見回した。

雅哉と勇氣はどうなったんだ？！

慌てて後ろを振り返った真司は視界に飛び込んできたものに絶句した。
紅い毛に被われた巨大な塊だった。

何だこれ・・・動物？・・・ゴリラか？！これえ？なんでこんなところに？でけえ。3mはあるんじゃないのか？てかなんで紅いんだよ。こんなの見たことねえよ・・・

それはまぎれもなく、巨大な紅いゴリラだった。ゴリラは倒れ伏していて動かない。眼は閉じていて眠ってるようにも見える。だが、こんなものが暴れ出したら間違いなく無傷では助からない。命の保証さえ危うい。

どうする？大丈夫なのかこれ・・・？暴れ出すんじゃないだろうな。

畜生、雅哉たちを捜さなきゃなんねえってのによ。どうする・・・

どうする・・・？！

戸惑う真司に最悪の事態が降り懸かった。真紅の巨獣が、動き出した。喉を鳴らしながらゆっくりと体を起こす。

やばいやばいやばい！起きやがった！どうする？！来るのか？！

起き上がったゴリラはゆっくりとこちらを見た。まずい、目が合った！ゴリラの顔が歪んだ。

グオアアアアアア！

吠えながらゴリラが飛び掛かって来た！速い！こんなデカイ図体なのに異様な速度だ。走っては逃げ切れそいがない。間一髪のところまで横っ飛びに避けることができた。

何だ？今こいつの動きが読めたような・・・

体の異常に疑問を抱いたが考えてる暇はない。次が来る！

ゴリラは拳を振り上げると真っ直ぐに振り下ろした。これも何とか避ける。繰り返し殴り掛かって来たが全てかわしきってみせた。

やっぱりだ。こいつの動きが予想できる。どうなってるんだ俺の体は！

信じられないが、視力が凄まじく向上している。筋肉の動きや眼球の動きが手に取るように解るのだ！思わぬ武器を手に入れた真司の心は踊った。勝機が見えてきた。

だがどうする？！こんな馬鹿でかい生き物、殴り合っても勝ち目はないぞ。考えろ、考えろ！

必死に辺りを見回した真司は、ここが廃ビルだということに気がついた。ここの上から落とせばもしかしたら……考えるよりも体が先に動いていた。ゴリラの脇をくぐり抜け、上を目指して走り出した。すかさずゴリラも後を追ったが、狭い通路と障害のおかげで中々距離は縮まらない。そしてとうとう屋上に着いた。

勢いよく屋上のドアが吹き飛ぶ。衝撃に耐えなかったコンクリートがパラパラと崩れ落ちる。砂煙の中から、真紅の巨獣が現れた。唸りながら標的の姿を探して回った。

いた。あの男だ。屋上の際に立ちすくんでいる。馬鹿め。肉片も残すまい。勝利に捧げるために怒号という名の凱歌をあげた。男がニヤリと笑う。いい度胸だ。

静かだ。だが空気は痛い程に張り詰めていた。沈黙を破ったのは巨獣の方だった。怒号をあげながら男目掛けて走り出す。もはやこの獣には男しか見えていない。男に巻かれたワイヤーも、足元を濡らす黒い液体も。

時間がゆっくり流れていく。獣の思考に目まぐるしい量の記憶が巡る。だがどの記憶もぼやけて何一つ理解できない。ただ一つ例外だった優しい男の笑顔も、もう思い出せなかった。

絶望

オオオオオオオ！！！振動する空気に思わずたじろぐ。やべえ、やっぱり怖ええ！失敗したら死ぬよな、やっぱ。ああ、駄目でもともと、当たって砕けろだ！

ゴリラがもう目の前まで来てる。もの凄い形相で襲ってくる。

今だ！

タイミングを見計らってその場から、落ちた。驚いたゴリラは思わず踏みとどまろうとした、が。できなかった。足が滑ってその場に突っ伏した。真司の撒いた油だ！摩擦の働かない油の上で踏みとどまることはできなかった。どうすることもできずにただただ滑って行く。そのまま真司の後を追うように屋上から真逆さまに落ちていく。加速の付いた巨体は滑るように飛んだ。慌てて何かを掴もうとあがくが、彼の手が届くものは何もなかった。

巨体が小さくなるに連れて、彼の声も小さくなっていった。最後にズドンという音を遺して、闇夜は再び静寂を取り戻した。

あっ・・・ぶね、落ちたよな・・・？二度とこんな賭けしねえぞ

真司は結んで於いたワイヤーを葛って下の階層に降りていた。恐る恐る下を見ると紅い点がピクリとも動かず沈黙している。急いで階段を降りて奴のもとへと駆け付けた。

凄惨な光景だった。辺りには鮮血が飛び散り、その中心に紅い獣が横たわっていた。手足はおかしな方向に曲がっていて頭部からは

おびただしい量の血が流れ出ていた。死んだか？恐る恐る顔を覗き込んだ真司の顔を僅かに開いた瞳が見つめ返した。驚いて尻餅を付いた真司はとんでもないことを耳にした。

「・・・し・・・ん・・・ちゃ・・・ん・・・」

それっきり巨獣は動かなくなった。

「え？何だよ今の・・・今・・・俺の・・・名前を・・・？・・・勇・・・気・・・？ちよつと待てよ。待てって！どういう事だよ！なあ！何でお前が・・・！」

震える手を目の前の遺体へ延ばす。真司の手が触れたその瞬間、遺体は灰となり崩れ落ちた。

もう何が何だか解らない。ただひとつ言えることは自らの手で親友を殺めたということだ。

涙が、溢れた。声にならない声を上げてその場に崩れ落ちた。むせ返って何度も何度も嗚咽した。勇気が・・・死んだ。あいつの笑顔は俺が奪ったんだ。

俺が・・・俺が・・・

何時間経っただろう。涙は枯れて、眼差しは光を失っていた。生氣のないその目は絶望を写す鏡そのものだった。

友を殺した。それだけが頭の中を満たしていた。だが、ある事を思いだして指先に力を込めた。

そうだ。雅哉・・・雅哉はどうした・・・？

ゆっくりと立ち上がって回りを見回した。人影はない。名前を叫

んでも虚しく響いただけだった。もしかして雅哉も勇気みたいに・
・。嫌な考えを振り払い、拳を固く握った。どこかへ逃れたのだからか。

悩んでいても始まらない。今は雅哉の生存を信じることしかできなかった。信じなければこのまま朽ちてしまいうだ。明るくなりはじめた空の下、自転車に跨がり雅哉の家へと向かう。もしかしたら帰ったかもしれない。力強くペダルを漕いだ。一握りの希望を抱いて友の死を後にした。

町に帰るとそこはまるで地獄絵図だった。道には無数のバラバラの死体が転がり、地面から壁まで一面を赤く染め上げていた。飛び散った肉片を見て思わず嘔吐した。

あまりにも酷い。何がどうなればこうなるんだ。空っぽになった胃袋を摩りながら再び歩み始める。雅哉を探さないと。真司は死体の山をひたすら突き進んだ。友の遺体がないことを祈りながら・

・
・
・

（孤独）

結局雅哉は見つからない。家まで訪れてみたものの、親御さん達の遺体しか見つからなかった。それにしても、この惨状は誰の仕業だ？明らかに人にできる芸当じゃない。いや、俺は心のどこかで結論付けていた。もしかしたら雅哉の仕業かもしれない、と。

突然化け物と化した勇氣、俺の体の異常、忽然と姿を消した雅哉。馬鹿げた話だ。そう心の中で笑い飛ばすがどうしても否定仕切れなかった。

「そんな訳ねえ・・・馬鹿げてる！これは事故か何かだ・・・そう！さっきの地震だ！そうに決まってる！」

壁に叩きつけた拳の痛みがこれが夢でないことを語る。真司は今自分の家へと足を運んでいた。周りを見る限り、こちら一帯に生存者はいそうにない。取りあえずは家へと向かう。こんな時でさえ身内の生死を気にかかけようとしないう自分の度の過ぎた諦観に嫌気がさす。複雑な気持ちのまま、着いてしまった。

酷い有様だ。門は崩れ道場も半壊。そして嫌というほどに飛び散った肉片の数々。何度見ても胸が悪くなる。込み上げてくるものを堪えてなんとか前へ進む。

軋む床、年季の漂う木材の匂い、清らかな静寂。中は思ったよりも綺麗で、まるでここだけが切り離されたようだった。その中で一つ、一層目を引くものがあった。

壁に架けられた二振りの日本刀だった。躊躇うことなくそれを手に取り鞘から抜く。よく手入れされたそれは不気味に静かな光を放っていた。ズシリと手に掛かる重量感に思わず唾を呑んだ。今自分の手に握られているのは人殺しの道具だ。

分かっている。だけど仕方がないんだ。もしこの惨事を起こしたものと遭遇すれば自分も危ない。そうだ。別に誰かを殺すわけじゃない。あくまで護身用に持って行くだけだ。

そう自分に言い聞かせて震える手で二本の刀を握りしめた。別に傷つけるのが恐い訳じゃない。死が恐いわけじゃない。ただこの手に握られた力の大きさに戸惑ってるだけだ。

誰かが聞いてるわけでもないその強がりを必死に心の中で叫んだ。

父と母の身に着けられていたと思われるものを台所で見つけた。引き裂かれた紺のネクタイと血に染まったエプロンだった。そこにあったのは遺体ではなくあちらこちらにあるものと同じ飛び散った肉片だった。

両親の死を目の当たりにしたというのに不思議と涙は出ない。俺にとってこの両親はその程度のものであったのだろうか。何も、感じなかった。憎しみも悲しみも怒りも。あらゆる感情が消え去り残ったのは言いようのない虚無感だけだった。

家を後にした真司は生き残りを探して再び歩き出した。だが数分もしないうちに歩みを止めて立ちすくんだ。溜め息を漏らして顔を上げた。

何も・・・ない。そう何も。在るのは物語らぬ死体の山と何処までも続く深紅の斑道だった。

今や自分は全てを失った。両親は死に、親友も姿をくらました。全てを失って真司は悟った。

また始めに戻ってしまった、と。

思い返せば俺の人生の第一歩も空白から始まった。何も持たずして生を受けたこの世に物請いをする事自体が間違いなのかもしれない。ただ始めに戻っただけだ。あの肥溜めのような路地に捨てられた時のように。

幻と現実を取り違えてしまっていたのかもしれない。あまりにもあの日常が眩し過ぎたせいで。何も持っていなかった俺に、幸せになることは許されなかったのかもしれない。代価なくして物を得られないように・・・

やっぱり、俺はずっとこんなのかなあ。いつも捕まえたと思ってもスリりと逃げていく。もう誰も俺を見てくださいないかもしれない。そう考えたら、急に恐くなった。涙が、ゆっくりと頬を伝った。

先生、俺また独りになっちゃよ。せつかく先生が居場所を見つけてくれたのに。先生が手を差し伸べてくれたのに。やっぱり弱いのかな俺って。

先生に、会いたいな。

そう小さく呟いて真司はハッとした。そうだ、孤児院を訪ねてみよう。あまり期待はできないが、もしかしたら何か解るかもしれない。物心着く前からあそこにいたのだ。希望はゼロじゃない。行き先が決まると、真司は涙を拭って歩き出した。横たわる死体の群れに目もくれることなく。もう真司の頭の中には大切な人達の死も薄れていた。その目には恐ろしい程の期待が充ちていた。これだけの惨事があったというのに。だが、誰もそのことに疑問を抱く者はいない。目指すはセント・アディエマス孤児院。もはや真司の頭に両親の死は存在しなかった。彼の思想は、もう人のそれではなかった・・・

〜故郷〜

あの凄惨な事件から一ヶ月。事件は世界中で報道され、未だにテレビの華を飾っている。世界でも類を見ないこの事件に多くの専門家も首を傾げた。数時間のうちに街一つが無人の廃墟と化し、数の合わない肉片が辺りを深紅に染め上げた。

まるで巨大な何かが人々を喰い漁ったように。

真司はひたすら孤児院を目指した。人との関わりを出来るだけ避けるために徒歩での移動をとった。知人には自分が死んだと思わせと方が都合が良かったからだ。

理由はそれだけではない。時折襲い掛かる体の激痛に伴って身体のあるこちらが変質し始めたのだ。体力の向上や身体能力の上昇はむしろ喜ばしいことだったが眼に現れたそれは人に見せられるものではなかった。

瞳は鷹のように細くなり、眼球は血走ったように赤く染まった。その醜く変質した眼を隠すようにサングラスをかけ帽子を被って人目を避けた。

そんな逃げ隠れるような短い旅が終わりを迎えた。十年ぶりに訪れたにも関わらず、そこはあの時と変わらぬ姿だった。

複雑な気分だ。慣れ親しんだ故郷のはずなのにどこか遠く近寄り難かった。それに真昼だというのに人影はおろか話し声すら聞こえなかった。

郊外といえどこの静寂はあまりにも不気味だ。錆び付いた門が軋んだ音を起てながら口を開ける。よく手入れされた芝生にでこぼこした石畳、枯れた噴水に小さな鳥小屋。本当にあの時のままだった。

真っ直ぐ庭を突き進んで宿舎の扉を叩いた。しばらくしても応答がなかったので仕方なく、勝手に入ることにした。

中に入ると小さなエントランスがあり、両脇に二階へと続く階段があった。昔見た風景より小さく見えるのは自分が成長したことを表していた。

本当に何も変わってねえなあ。ここを出たのも丁度同じ時期だったかなあ。先生達元気かな、まだ皆いるのかな。本当、久しぶりだな・・・

思いに耽りながらあちこちを歩き回った。昔の自分の部屋や食堂、院長室も覗いてみた。

だがやはり何かがおかしい。もぬけの殻なのに致る所に今し方まで人がいた形跡がある。院内は全部探したはずだ。まだ探していないのは、

「地下室か・・・」

この地下室はかつて一度だけ訪れたことがある。危険だということ子どもたちは立入禁止になっていたが、好奇心に負けて夜中にこっそり忍び込んだ。

数年ぶりに再び地下室に忍び込んだ。あの時と同じく施錠されていたが鍵を壊して無理矢理入った。中は真っ暗だったがちゃんと照明は付いてあった。中は小さくて、食糧が保管されていた。だが、その配置が妙に気になった。あの時は気にならなかったが、どうも部屋の一角を隠してるように見える。

やっぱりなにかあるのか？人が全くいない割に何かおかしい。やっぱりここに来て正解だった。

荷積みをつくり返していくと案の定、小さな扉が現れた。中は小さな階段がひたすら続いていた。歩けど歩けど下は見えない。螺旋

旋状になったその階段を5分程降りるとやっと出口が見えた。

さて、中はなんだ？何かの実験室か？ショッカーでも創られてたりして。なんてな……

そんなふざけた話で必死に気分を盛り上げようとした。何かは判らないが良からぬものがある気がしてならなかった。自分の愛したこの地が決して悪行を冒していないようにと心の中で叫んだ。

だが現実はことごとく真司の期待を裏切ってくれた。中は小さな手術室のようで、真ん中には寝台が置かれた。片隅の台には注射器やらメスやらが綺麗に並べられ、その隣には椅子に腰掛けた眼鏡の男が佇んでいた。ドキリとして思わず後ずさりをしてしまった。男は顔を上げてにっこり微笑んだ。その不気味な笑顔に、真司は冷たいものを覚えた。真司の動揺を悟ったような男はゆっくり口を開いた。

「おかえり、真司君。遅かったね。ずっと待ってたんだよ」

男の言葉に真司は言葉を失った。間違いない。間違えるワケがない。この人こそ真司の恩人であり孤児であった真司を拾った先生その人だった。

（狂気）

「よくここを訪ねる気になったね。帰省本能が働いたかな。それにしても君にはがっかりだ。ほとんど生身じゃないか、それじゃ長くはもたないな」

は？何言ってるんだこの人は？十年ぶりの再会だつてのにいきなり訳の分からないことを。もっと他にあるだろうが。

けど、やっぱり変だ。この異様な落ち着き方、とても無関係とは思えない。

「先生は、何か知ってるんですか。あの事件のこと・・・」

相変わらず笑顔は絶えない。だがその笑顔はどこか深く、暗かった。

「知ってるかだつて？それは君の方がよく知ってるんじゃないのか？君はあの場所に居て、犯人が誰かも知ってると思うがね」

ガン！古びた煉瓦の壁に亀裂が入る。血管が浮き出て腕がパンパンに膨れ上がる。真っ赤になった拳が小刻みに震える。

「やっぱりアンタ何か知ってたんだ・・・！勇気も雅哉も俺も！共通点はこの出だつて事だ！答えろ！雅哉は消えちまつて勇気はでけえ化け物になっちまつた！それに俺の体！この目はどうなってるんだ！」

勢いよく外したサングラスを投げ捨てると真紅の眼が姿を現した。その醜く変貌した眼を見て男は一層深い笑みを浮かべた。

「ほう！完全な失敗作という訳でもないわけだ！人格がある分これはこれで成功か！どうだね新しい体は！その様子だと身体能力も上がってるんじゃないかね？！君は基礎が他より数段上だっただけに欠陥が判ったときは肩を落としたもんだ！いやはや実に素晴らしいな君は！いつも我々の期待を上回る！」

男はひたすら歓喜の声を上げた。男の笑い声が静まり返った地下室に反響する。異常だ。狂ってる。何だっというんだ一体。

「雅哉は何処だ・・・アンタなら知ってるんじゃないのか・・・アイツは無事なのか・・・？」

震えた声で一語一句噛み締める。もう意識が吹っ飛びそうだ。今ここで思い切り刀を振り回したらさぞ爽快だろう。

「君は相変わらず優しい男だな。こんな時でも友の身を安ずるか。安心したまえ彼はここに居るよ。君と同じく本能に習ってね。そうだ、一ついいかね？君の親友の倉西君なんだがね、いくら待っても帰って来ないんだよ。本当なら今頃戻って来てる筈なんだが・・・一緒にいた君なら何か知らないか？」

真司の鼓動がドクンと高鳴る。死の感触が甦ってきた。

「あいつは・・・死んだ・・・俺が・・・この手で・・・殺した・・・」

震える真司を見て男は呆気にとられた。予想だになかったように口をポカンと開けた。なんとも間抜けなその表情が徐々に形を変えていく。俯いて肩を震わしたかと思うと、今度は豪快に笑い出し

た。

「クク、死んだ？君が殺しただって？アッハッハッハ！こいつは驚いた！つくづく君には驚かされる！覚醒して間もないとはいえ、遙かに劣るその肉体で完全体の彼を死に致らしめるとは！気が変わった、こいつは最高の余興だ。いいだろう、全てを教えてやる！」

男に誘われて真司は外に出た。陽はすでに傾き始めていて二人を朱く染め上げた。ポケットに手を突っ込んで地下の入口にもたれ掛かると男は葉巻に火をつけた。

「君の考え通り、ここはただの孤児院じゃない。差し詰めここは人体実験のための資材置場といった所かな。そう睨むな。どうせ朽ちるはずだった身だろう？一時とはいえ人並みの人生が送れたんだ。有り難く思いたまえ。そして君らはその実験体の被験者だ。題目はヒトと他種の遺伝子の融合。ちなみに君はシリアルナンバー10808、君のモデルはタカとジャガーの二種を掛け合わせてみたんだが結果は失敗、肉体は不完全で欠陥も見受けられる。そんなに長くはないだろう」

左腕にズキンと痛みが走る。言われなくても分かっている。この痛みが何を意味するのか。

「そんなことはどうでもいい・・・なんのためにこんなことをする。何が目的だ？どうせろくでもないことだろうがな」

男はニヤリと笑いを浮かべた。夕焼けが彼を怪しく照らす。もう後には戻れない。再び男の口から紡ぎ出された言葉が彼を暗き輪廻へと誘う。

（敗北）

「さて、話の続きと行こうかね。」

吸い終えた葉巻の火を足で踏み消すと男は真っ直ぐに真司と向かい合った。

「我々の目的か、そうだな。言うなればヒトという種への断罪といったところかね」

「ふん、断罪か。大きく出たもんだ。聖者気取りで人類抹殺でもやってみるか？」

「止してくれ。我々はそんな野蛮じゃあない。ヒトという種は今まで無秩序に野放しにされてきた。私腹を満たすために多種を絶滅に追いやり、この美しき星を我がものの顔で作り替えてきた。何故そんな愚行が今まで罷り通って来たのか？ 答えは簡単だ。それを咎めることのできるものがいなかったからだ。だから我々は創り上げたのだ！ ヒトの上に立つ生命を！ 弱きものたちの代弁者を！ 滅ぼすことは簡単だ。だがそれが何になる？ それでは結局ヒトと何も変わらない。ヒトという種は己が身をもって知る必要があるのだ。狩られるものの立場というものを！」

男はいかにも誇らしげに胸を張った。どの時代も悪党というのは理想だけは立派なもんだ。

「御高説痛み入るね。だが人の路を語る神父の言うことじゃあねえな。汝殺すべからず、だ。聖書にもちゃんと書いてあんだろ？ しっかり読めやクソヤロウ。結局お前らみたいな夢想家は殺しを肯定し

てるだけじゃねえか。奪うことでしか答を導き出せない奴が一人前に理想を語ってんじゃねえよ！」

「愚かな。自由とは規律あつてこそ許されるものだ。規律なき人間に慈悲は必要ないと思うがね。それに彼らもヒトがいなくては生きられない身。ヒトという種が絶えれば彼らも生きてはいけないのだ。無論君も例外ではないよ。さてどうするかね？ヒトを喰わぬというなら君の肉体は三年ともつまい。さあ選びたまえ。死を選ぶか誇りを捨て生き存えるか！」

「上等だ・・・三年しかもたないってんならそれまでにお前らを潰すまでだ。俺はお前らを許さねえ。必ず根絶やしにしてやるからな！」

凄む真司に男は満面の笑みで指を鳴らした。パチンという音が辺りに響くと物影からたくさんの怪物が現れた。どいつも見たことのないような不気味な姿をしていた。

「懐かしい顔ぶれだろう？覚えてるかね？明、洋介、千尋、茜、悟志・・・・・・・・」

優香、秀徳、拓也、翔平、雅哉・・・・・・

忘れるものか。短い間だったが同じ路を歩いた者たちだ。忘れる訳がない。

「さて、君の信念がどれほどのものか試させてもらおうか。」

言葉と同時に全員が一斉に襲い掛かって来た。次々と襲い来る連撃も、皮肉だがこの目のお陰で難無くかわすことができた。隙を見計らって一体ずつ確実に攻撃を打ち込む。だがやはり体力は並の獣

より格段に上で、五、六発打ち込んだところで倒れる気配はない。そのうちだんだんと攻撃を受け始めるようになり、着実に追い詰められる結果になった。数が多過ぎる。息を上げながらも必死で迎え撃つ真司の背後から凶刃が襲い掛かった。左肩に食い込んだそれは真司の左腕を上空高く打ち上げた。

左肩からおびただしい量の血が吹き出す。真紅の血の池に真司は顔から突っ伏した。真司の悲鳴に男は興奮した。あがき悶える真司を尻目に男は甲高い喜声を上げた。足元に転がった真司の左腕を拾い上げるとなんとそれに喰らいついた。腕を貪りながら男は倒れ伏した真司を見下ろした。

「もう終わりかい？少しガツカリだな。結局友を二人殺したただじやないか。我々を根絶やしにしてくれるんじゃないのかね？んん？言っておくがこの孤児院は一角に過ぎんよ。我らの院は世界中に点在する。我々はこれより総本山であるイギリスへ飛ぶ。君にまだ意志があるのなら追ってきたまえ。まあその傷で死ぬことはない。これで少しは自分の立場を弁えることができるだろう。縁があればまた会おう。それまではさよなら、だ。」

薄れゆく意識の中男がきびすを返して立ち去って行く。追い掛けようにも体が動かない。血を流し過ぎた。朦朧とする意識の中で真司は自分の弱さを噛み締めながら墜ちていった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9176a/>

#true sword

2010年12月21日19時22分発行